

画像診断（へリカルCT）

動 向

CT肺検診において救命的な役割を演ずる分野は、肺がんが第一に挙げられる。近年、このほかに重大な疾患として肺気腫、COPDが、クローズアップされてきている。いずれの疾患も、早期像はX線像では至難とされ、CTが有用であり、しかも、予防が可能な疾患である。特に肺がんと気腫は喫煙がもっとも悪影響をおよぼしている。

肺がん予防には、禁煙が第一である。R. Dollの報告にもあるように、がん死因の1/3は食事、1/3が喫煙、残り1/3がその他であるといっている。食事関係は生存上、避けられない部門であるが、これとて、各種疾患予防目的の下、生活習慣改善を目標にメタボリックシンドローム健診が導入され、各種の検査を網羅して検査が準備され、さらに、直接の、脂肪測定も入っているにも拘らず、一方、喫煙は、生存に絶対必要な事象ではないばかりか、発がん、循環器系障害など両者にまたがっての危険物と見るべきだろう。人々はもっと些細なことにも神経質なのに？ちょっと片手落ちか。一方、キャンペーンに関しては、国、県、市がかなり力を入れている、特に、県は'05年から、がんへの挑戦・10カ年戦略が策定され、推進中である。策定の展開の第一にがん発生要因にR. Dollのレポートが上げられ、県民に食生活の改善と禁煙を薦めている。この策定による結果を期待している。

肺がん対策には、発生予防、早期発見などいくつかがあるが今までに、肺がん死亡は増加一方で減少は一向に見られない。X線検診でも池田、成毛、金子班と筆者もいささか協力したが道遠しの感であった。現在も鈴木、中山班に参与しCT検診のコホート調査で協力中だ、これが、法務、総務関係の壁に当たってなかなか進まない。欧米諸外国と比べると誤解と一部の古い考えに引きずられているとしか考えられない。集団の追跡をすれば自ずと追跡不能者がある、この群も含め全集団の追跡が出来ない限り真の追跡でない。この隘路が一日も早く解消されることを願ってやまない。

わが国においては、CTを導入した肺癌検診が多くの医療機関や検診機関で行われるようになってきている。今後も積極的な導入が推測されていくだろう。さらに国は、じん肺関係の検診にも力を入れ、X線検診と共にCT検診の導入にも踏み切った、尼崎市における久保田工場の件に始まったが、当所もこの検診の一端を担うこととなって、CT部門では1000件に達している。すでに、数例の肺がん及び、その疑いが発見されている。これらの例は、多くの、基礎病変が加わっているため指摘は、困難を極め、治療に関してはさらに困難と考えられる。

ひるがえって、低線量CT検診の導入によって肺癌検診の主目的である、肺癌死亡率を減少させる効果が有るか否かは、前項で述べた追跡に関する壁も加わって、未だ明確には求められていない。従来型の胸部X線による肺癌検診は、積極的に取り組んで

いる地域の集団検診、医療機関による個別検診にかぎらず、オッズ比が約0.5~0.6と算定されており、その死亡率減少への寄与効果が示唆されている。神奈川県では、湘南地域にそれが見られる。しかし、国全体を見ると最終目標である“肺癌死亡数・率の減少”という点では、ほど遠い。一方、機器の進歩は目指しくCTでは、MDCTは1回転で16cmをカバーし冠状動脈のプラーク、石灰化、内腔の径まで決められるまでに至った。デュアルエネルギーによって組織の性格をさらに細かく分けられるようになってきている。また、近年、MRIも3テスラーの装置が出て精度、画質がCTに近づき、化学シフトの影響を強く極められるようになって来た。いずれにしても現在の画像を先ず正確に運用することであり、経済的ロスを減らすためフィルムレス化とし、画像保管運用を単純化しさらに、情報の一本化を図るRadiology PACS (Picture Archiving & Communication System) さらにEnterprise(院内) PACS組み立て、ひいては画像情報を通じて他機関との連携を図り精度の高い検診結果を得ることが出来よう。

現在は、この点全体の把握が非常に低く、E. PACSの早急な構築を望む。

ここで、96, 4, 8, の検診開始より2004, 3, 31までの10年間の結果をかえりみる。

検診結果

1. 検診受診者数は前項延べ11,516例中、初診5,242、経年6,274例である。男女比2:1-3:1で、初診が減じて経年例が増えていた。
2. 発見肺癌は全例56例男性40例、女性16例であった。発見率(10万対)486,472、527であった。標準化発見比は、男性2.61、女性8.47、であった。なお、AAH6例が含まれている。
3. CT検診発見例の組織型は、腺癌41、扁平上皮癌5、小細胞癌4例、AAH6例であった。このうち、夫々2、3、2、例が原病死した。なおこの死亡した7例はすべて単純X線(X線)で指摘できていた。また、腺癌1例と扁平上皮癌1例は検診外発見であった。一方生存例では、3例がX線で指摘できたのみであった。
4. 発見例中に重複癌が8例、また、他病死2例は、腎不全と食道癌であった。
5. 年次ごとの発見率は変動があるも次第に減少している。

昨年度に絞って、受診数は初回例と経年例を分けて示すと、初回、男282、女141継経年、男756、女300計1,038,441、であった。また、初回男女計423、継年発見は1,056、総数1,479であった。この中に、男初回例で、1例の肺癌(腺癌、1期)と前がん(AAH)1例が発見された。CT検診以来の年度ごと発見数では最もすくなかった。しかも、初回例のみに発見されていた。

関係の集計表は103頁に掲載